



「発達に特性がある子どもへの

ICT 活用で広がる可能性」

齋藤理一郎(群馬県立太田フレックス高等学校)

○ あの休校期間に感じたこと

2020年2月末に突然はじまった休校は、年度が明けて5月末まで延長され、その後も分散登校などで、「今までのようには生徒が教室に集まれない」状況が続いた。ちょうど「一人一台端末を活用したオンライン学習」に、各校が取り組み始めていたり、対応を考えていたり、「うちの学校は、まだ先だろう」とのんびり構えていたりしていた時期であり、「新しい学びのカタチ」に戸惑う職員室(と、職員同士の温度差)は、どこも似たような感じだったのだと思う。

もっとも、子どもたちは思ったより柔軟で、「こんなオンライン教材、興味を持って取り組んでくれるかなあ?」と不安になりながらメール配信した課題にも、けっこう飛びついてくれて、夜中でも明け方でも着信音を響かせてくれた。もちろん、教室と違って教員の目が届かない場所で、サボる生徒はまったく手を着けないのは想定内だ。意外だったのは、ふだんの教室では目立たず消極的な学習姿勢の生徒が、ちゃんと課題を理解して取り組んでいたり、分からないところをメールで質問してくれたりしたことだ。あの頃、「コロナ禍でピンチの今だからこそ、学びに先んじるチャンス!」とばかりに宣伝、広告を打っていたビジネスと、それに振り回されるオトナが多かった中、子どもたちは「自分のペースで、着実な学び方」を心得てくれたことは、いま思うと、何よりの救いだった。

○ 「魔法のプロジェクト」との出会い

「オトナの都合ではなく、子ども自身のためのICT活用」に手応えを感じていたその頃、今回お話ししたい「魔法のプロジェクト」への研究協力のお誘いを受けた。これは、ソフトバンク株式会社と東京大学先端科学技術研究センターの中邑賢龍さんの共同プロジェクトで、「ICTですべての子どもたちをしあわせに」を活動テーマに掲げている。2010年度に始まった歴史あるプロジェクトは、当初は携帯電話(ガラケー)で障がいのある生徒の学校生活をどう支援するかの実践研究に取り組み、やがてタブレ

ット端末やスマートフォン、そして最近では人型ロボットやAIスピーカーを生徒と支援者に一年間貸与し、実践成果を共有、公開している(「魔法のプロジェクト」で検索!)

これまでの「魔法のプロジェクト」への研究協力校は、特別支援学校や小中学校の特別支援学級が多かった。少子化と定員枠のバランスか、最近では高等学校にも特別支援学級からの入学者は増えている。もっとも高校には、「入試を経て合格したのだから」とか「高校は義務教育じゃないんだから」とかを盾にして、子どもたちの学びの特性を生かそうという視点に立ちにくい先生方が未だに多い。「この子たちが適切な学び方を身につければ、もっと伸びるし、伸ばせる」という現実を見てほしくて、知ってほしくて、2021年度から研究協力校に名前を連ねさせてもらっている。

○ おとなしくて目立たなければ、それは「いい子」か?

「魔法のプロジェクト」への研究協力に際して、僕がバディ(相方)に選んだのは、知的障がいを伴う自閉症と診断されている高校2年目の生徒だった。中学では特別支援学級に在籍していたが、高校進学の時点で普通高校を希望し、受験。無事に合格をはたした。バディの1年目の学校生活は、電車を乗り継いでの遠距離通学を楽しみ、落ち着いたものだった。学習についても、ルーティンが定着すれば物覚えがよく、ほとんどの科目で「問題なく、いい子」に過ごせている様子だった。ただ「他人とのやり取りが難しい」「予定の変更に戸惑う」「決まった作業には取り組むが、表現活動など創造的なものになると固まってしまう」などの課題も聞こえてきた。この辺りに入り込んで、バディ自身にも「自分の課題」として意識してもらおう、というのが、実践研究の始まりだった。

週に1回、90分を「支援タイム」と名付けて、個別対応する時間にした。プロジェクトから貸与されたタ

タブレット端末を発信ツールとして自己表現の経験を積み重ね、他者とのやり取りに発展させよう、と目論んだ。が、実際に活動を始めてみると、タッチパネルを爪でカツカツ突くので操作がうまくいかずストレスを感じているように見えることがあったり、話すよりも書くコミュニケーションを好み、やり取りの時間が長くなったり、活動の負荷が高くて集中が続かなくなると、自分で支援タイムを打ち切ってしまったり、想定していた以上のつまづきが出てきた。最初、「おとなしくて目立たない、『いい子』ですよ」と言われていたのは、なんだったのだろうか？たどきとこの子は、この個別対応の時間がなかったら、支援の点では後回しになっていたんだらうな、と思うと、成長できるチャンスと向き合っていることに感謝だった。

○ 支援を通して見せてくれた姿

当初の目論見とのギャップを軌道修正しながら、週1回の「支援タイム」でバディとのつながりを持続けた。タブレットの操作に慣れてくると、「えにっき」というアプリが気に入って、使い始めた。これは、読んで想像できる通り、写真と文章で出来事を記録するアプリだ。学校内や休みの日の活動について写真に撮って、説明文を添えて僕に送ってくれた。僕も同じアプリを使ってやり取りし、二人で「交換日記」のようなものを始めた。バディが送ってくれる内容は、好きなもの(鉄道や日本史、動物)についてで、文章は、最初は短く事実を伝えるだけだったが、読んで思ったことを返信するうちに、長い説明を返すようになったり、事実だけでなく感想を添えるようになったり、「次は・・・したい」という願望や、想像を描けるようになった。自分が伝えたいことに、相手が興味を持つと、さらに重ねて伝えたい気持ちは出てきたのは、「他人とのやり取りが難しい」と言われていた

バディにとっては、大きな進歩だったと言える。受け止める僕も、電車の車輛やマニアックな戦国武将について勉強できるのは楽しかった。ただ時々、彼が大好きな「節足動物」の写真をドアップで送ってくるのには、かなりビクビクした。

教科学習については、タブレット端末の活用は、バディのルーティンにバッチリはまったようだった。特に英語の教材(Quizletの学習セットや、Jamboardを使った並び替え作文など)には自分で進んでくり返し取り組んだ。その成果として、前期期末テストはクラストップ!それに慢心した後期中間テストはひどいものだったが、後期期末テストではクラス2位まで巻き返した。もっとも、そんな点数や順位より嬉しかったのは、学習に自信を持ったおかげか、課題として出していた英作文に取り組み、Googleスライドで提出してくれたことだった。もし1年目の彼からの成長がなかったら、こういう創造的な活動には手が止まってしまっていたらう。

○ 発達に特性がある子の可能性を広げるツールとしてのICT

かつて勉強は、「知識で差がつくもの」であった。やがて「経済格差が学習経験の差」になり、問題視されるようになった。一人一台端末の活用で、「(その気になれば)いつでもどこでも学びにアクセス」できるようになった今、生徒自身が「やるか、やらないか」が学習成果を左右しうる。しかも、端末の活用については、子どもたち自身が、「自分が使いやすいものを、より使いやすく」工夫できる力を持っている。教員は、「生徒をその気にさせる」ことが、まず大事になるのではないだろうか。

誌面スペースの都合で、自信を持ったバディのその後の「やらかし」については、またの機会に!!

太フレ生の英語力 2021



Hello, everyone!

Do you know joyful train?

I like Resort Shirakami.

Resort Shirakami is running between hirosaki and Akita.

We can see Nihonkai frow the window of Resort. Shirakami.

Resort Shirakami started its operation on April 1st. 1997.

Thank you for reading.